人文地理学研究　XII　45～59　1988

新潟県朝日村における山菜の役割

佐々木　　博

Ⅰ　はじめ
Ⅱ　新潟県の山菜採取と朝日村の位置づけ
Ⅲ　朝日村の概況
Ⅳ　山菜の経済社会的意味
　Ⅳ－1　三面集落の事例
　Ⅳ－2　高根集落の事例
Ⅴ　森林資源の利用と村の活性化
　Ⅴ－1　林産物の加工
　Ⅴ－2　森林のレクリエーション利用
Ⅵ　おわり

Ⅰ　は　じ　め

山菜の生産量の把握はむつかしく，県林政課が市町村に依頼して推定してもらった数値が県統計に掲載されている場合がある程度である．多くの場合，山菜に関する統計は掲載されない．ましてその生産額となると，雲をつかむに等しいほど困難である．しかし，ある時期山菜は山村の経済・社会に重要な役割を演じていたことは確かである．

自然食品ブームと戸外レクリエーション活動の普及によって山菜採取は従来とは別な形で細々と続けられ，地方山村では山菜に代わる収入源を兼業・観光業などによって埋め合わせようと努力している．新潟県朝日村を例にとり，山菜の地域経済・社会に置ける役割の変化と，山菜衰退後の新しい動きを探ぐるのが本報文の目的である．

現地調査と文献による調査であるが，数的把握が，官庁統計を用いる研究に比して非常に困難であった．

Ⅱ　新潟県の山菜採取と朝日村の位置づけ

新潟県林政課の特用林産物生産量によると，1986年の山菜採取はわらび499.3ｔ，ぜんまい126.5ｔ，わさび0.7ｔであり，他の特用林産物のえのきだけ（2,643ｔ）・ひらたけ（1,267ｔ）・日本桐（1,107ｔ）・生しいたけ（1,078ｔ）・なめこ（962ｔ）に遠く及ばない．10年前の1976年にはわらびは756.1ｔで，日本桐（3,733ｔ）・黒炭（1,439ｔ）・生しいたけ（815ｔ）に次いで４位を占めていた．1976年から1986年の10年間の主要特殊林産物の増加率をみると，えのきだけ458％，ひらたけ455％，菌床なめこ318％，乾しいたけ246％などの増加率が大きく，逆にわらび66％，ぜんまい91％，わさび７％などは減少してきた．

1986年産山菜の市町村別生産量は5,000kgとか40,000kgなどとラウンドナンバーで表示されているところをみても，全くの概数程度の信頼度しかないが，他に頼る数字がないので，それによって朝日村の位置づけをみる．わらびは朝日村が41ｔで県内トップ，次いで北隣する山北村が40ｔで２位，以下糸魚川市（29ｔ）・入広瀬村（26ｔ）・上川村（24ｔ）と続いている．ぜんまいは朝日村は５ｔで

松代町（14ｔ）・牧村（10ｔ）・守門村（9.6ｔ）・入広瀬村（８ｔ）・湯之谷村（7.5ｔ）・上川村（６ｔ）に次いで第８位に過ぎない．

良質な山菜は雪の深い東北日本に成育するといわれ，新潟・福島・山形県の山地が主要な採取地である[1)]．

Ⅲ　朝日村の概況

〔村域〕

村域は東西35.8km，南北24.9km，面積626.40km^{2}県内最大，日本第２の自治体であり，２位の糸魚川市（467.14km^2）の1.3倍にもなっている．人口は13,831人（1985）で人口密度はわずか22.1人/km^{2}に過ぎない．西端は村上市街に近い三面川沖積低地の海抜12mから，東端の山形県境の西朝日岳の1813.7mにまで1800mの比高があり，平均勾配は50m/kmと非常に急勾配である．南西端の三面川とその右方支流高根川が合流する付近に狭い平野が開けるのみで，他はすべて山地である．総面積626km^{2}のうち林野が569km^{2}も占め，林野率は90.8％に達している．田は19.2km^{2}で3.1％，畑は3.4km^{2}で0.6％，樹園地率は1.6km^{2}で0.3％に過ぎない．

〔人口〕

林野率90％を越す山村のため，人口は1955年の19,184人をピークに人口センサスの度毎に減少してき，1985年には13,579人になってしまった．1954年に市町村合併促進法によって館腰・三面・高根・猿沢・塩野町の５カ村合併によって朝日村が誕生したが，奇しくもその頃が人口のピークであった．1985年の旧村別で人口規模が大きいのは高根地区3,206で，以下館腰地区2,911，塩野町地区2,805，猿沢地区2,650と続き，最も小さいのは三面地区の2,006である．1980年から85年の５年間で最も大きな人口減少を示した集落はダムに水没するため全村移転した三面の63人減を筆頭に，塩野町－55，岩崩－33，大須戸－30，蒲萄－29など最東端と最北端に位置する平地が狭くて山域の広い集落である．旧村を構成する集落のうち，約半数は南西端の沖積平野の水田地帯に位置している．館腰・三面・高根を構成する集落の約半数は，水田の少ない．山間に位置しており，山域に依存する度合が強い．

〔財政〕

村の予算規模は1986年度39.5億円，歳入源別では地方交付税19.3億円は総歳入額の48.8％（全国の地方財政財源の平均は18.6％）と最大であり，次いで村税5.4億円，13.8％（45.5％）・村債4.9億円，12.4％（8.4％）と続き，自主財源が小さく国の補助と地方債で支えられている典型的な僻地の歳入パターンを示している．歳出では教育費（総歳出額の15.7％）・公債費（14.7％）・民生費（14.3％）・農林水産費（13.1％）・土木費（11.3％）が主要なものである．

〔産業構造〕

産業別就業者をみると，第１次産業2,867人（1980），38.6％（全国は10.9％），第２次産業2,536人，34.1％（33.5％），第３次産業2,032人，27.3％（55.3％）で，第１次産業率が高く，第３次産業率が低いことに特色がある．総世帯数3,072（1985）の68.7％，2,110戸が農家であり，50.7％，1,557戸が林家である，もちろん世帯と農業センサスでの戸とは異なる概念ではあるが，戸数の統計

がないので世帯をもって考えてみた．林家率が約5割強を占めるところに，朝日村の産業構造の特色がある．

農家数2,110戸のうち，専業はわずか3.2%の67戸，96.8%が兼業（第1種14.6%，第2種82.2%）である．圧倒的多数の第2種兼業農家のうち，世帯主兼業でかつ兼業が主である1,416戸の兼業業種をみると，恒常的勤務が64.2%，日雇・臨時雇17.4%，出稼ぎ7.6%，自営兼業6.9%である，ちなみに全国の専業農家率は14.8%（1985），兼業農家率は85.2%（第1種15.2%，第2種70.0%）で，朝日村の農業は専業農家率が低く，第2種兼業農家率が高いことに特色がある．

この第2種兼業率の高さは経営耕地面積の零細性からも説明できる．平均経営耕地規模は1.15haで，全国平均よりもやや小さい．経営耕地規模別階層で，最も多いのは0.5～1.0ha層で全農家の28.0%を占めている．0.3ha未満層が12.6%，累積して0.5ha未満層25.3%，1.0ha未満層53.3%，1.5ha未満層72.4%，2.0ha未満層84.6%である，

第2次産業人口2,536人の約半数を村内の工業で収容しており，50工場，従業者数1,176を数えている．50工場のうち最も多いのは木材工場で12，次いで食料品工場7，電気工場6と続いている，しかし，従業員数では電気が514,次いで木材147,家具126と続いており，林業関連工業に特色がある．

1914年，国鉄村上線（新津－村上）が開通し，1917年に旧高根村南部の原野を買収した日本の石油王中野貫一が開墾して，今日水田46ha，畑32haの街村風の中野集落を開いた．第2次大戦後の1953年県営三面ダムが，1957年に猿田ダムが完成した．1967年の羽越豪雨によって計画水位をはるかに上回り，治水計画が再検討された．その結果既設の三面ダムや河山の改修とあわせて，新たに奥三面ダムが計画され，1985年，42戸の三面集落が「三面ここにありき」の碑文と住民の名前が刻み込まれた石碑を残して，全村移住して閉村することになった．1971年から着工していた山形県の朝日村と結ぶ朝日スーパー林道52km（新潟県側37.5km，山形県側14.6km，巾員4.6m）が71.8億円の巨費を投じて1983年に完成し，新しい観光地の刺激となっている．

Ⅳ　山菜の経済社会的意味

山菜採取はダム工事などの公共事業，出稼ぎ，観光地化などと並んで，山村人口の維持機能があるといわれている．平地稲作農村における田植休暇にも相当するゼンマイ休暇が6月上旬に小中学校で設けられていた．しかし，今日では拡大造林による山菜の減少，採取者の高令化，道路整備による都会人の山菜採り入山による山菜の濫獲などによって，山村における山菜の持つ経済社会的意味は減少してきた．三面地区茎太小学校では5月中旬，ワラビ採り大会と称して半日間全校でワラビ採取に入山し，賞を決めたり，採取した山菜は農協に出荷して児童会・生徒会の費用に充てたりしていた．最近は農協の買い上げ価格が低いため，学校の先生が自家消費用に買い上げたりしている．

山菜を地元民が自家消費用に採取していたことは容易に想像でき，とくに三面地区の千縄・茎太・猿沢地区猿沢で山菜取りが盛んであった[2]．朝日村農協扱いの1986年4・5・6月3カ月の実績は，ゼンマイ337万円，ワラビ（2,272kg）62万円，コゴミ（449kg）59万円，その他の山菜24万円であった．出荷先は，中条市場や漬物工場などで，農協扱い量が全量のどの位かは不明である．

Ⅳ－1　三面集落の事例

三面集落は三面川から末沢川が分岐する地点の三面川右岸，海抜180～200mにある．1926年小国から林道（車道）が開設され，さらに1936年米坂線が全通し南の山形県小国町折戸から蔵峠（500m）ルートによりのアクセスが高まり，ゼンマイ・ナメコなどが米沢の山下食品などへ出荷され，1940年頃まで黄金時代を迎えた．1940年三面国有林開発事業が始まったが，戦時体制下で中断した[3]．1962年，小国・三面間27kmの林道が完工するとゼンマイ・ナメコ・栗が高値で販売されるようになった．さらに林道完工の翌1963年，国鉄バスが小国から乗り入れるようになったが，4年後の1967年廃止されてしまい，再び陸の孤島と化した．1955年猿田ダム湛水により，ゼンマイ採取の良い自生地をうしなった．その補償金で舟を購入して，より奥地で採取するようになり，1955年以降の山菜ブームで安定した高い収入を得るようになった．

1955年頃の三面の現金収入は，ゼンマイ5,200kg，1kg300円として，156万円（1戸平均5万円），栗46万円，ワラビ18万円，ナメコ・キノコ類30万円，毛皮類数十万円であった．ある農家の収入割合は，山菜6，栗2.5，狩1.5であった．大部分の農家は毎年降雪前11月末頃，翌年5月頃までの冬季間の飯米・食糧を購入し，搬入しておかなければならず，その資金の多くは，翌年のゼンマイ採取を担保に小国などの仲買人から前借していた．

1985年11月，奥三面ダム建設にともなって三面集落42戸は全村移住した．29戸は村上市南西部，JR羽越線と松山集落の間の新開地に，1戸660m^{2}程度の敷地に御殿のような立派な新築住宅に住んでいる．それ以外では豊栄市に5戸，新潟市2戸，新発田市1戸，松山地区以外の村上市に移住した．移転補償金は5,000万～1.5億円といわれている．村上移住によって離散家族が1カ所に集合できた家も多い反面，転職がうまく行かない悩みを抱えている．10戸は朝日村南西部小川付近に水田の代替地を手に入れ，2戸は通勤耕作している外は，他人に貸して6万円/10a程の収入を得ている，代替地は区長高橋利博で70aの水田を得た．農業以外では，木工所，営林署山仕事，土方など，女子は瀬波温泉のホテル・旅館に勤めてる人もちらほらいる．移転後も三面へ山林労務で仕事に行ったり，シーズンには山菜取りに三面へ出向いている人は多い．1億円の補償費も住宅建設・生活費・転業資金などで底をついてくると，20～30日間で100万円の収入が得られたゼンマイ採りに郷愁を感じている人は多い．29戸の三面出身者だけが孤立した団地に住んでいる現実を，年配者は気心が知れていて快適である，と感じている．三面で商店をやっていた人は，団地内で酒屋を開いた．

三面集落全村移住直前の調査が二つある．1985年2月の農業センサスと10月1日の国勢調査である．役場の資料では42戸全村移住となっているが，廃村1カ月前10月1日の人口センサスでは30世帯76人おり，1980年の人口センサスでは49世帯139人（男34，女42）であるから，すでにかなりの世帯が移住済みであった．人口は1960年の230から1970年198，に1980年139と一貫して流出し，減少していた．農業センサスでは農家数29，1980年（30戸）・1975年（32戸）と比べそれ程減ってはいない．しかし農家人口は1975年の156から1980年112，1985年101と約⅔に減少し，とくに男子は1975年の69から1985年の40へ－29，女子の87から61へ－26よりも大きく，男子人口の流出が大きかったことを物語っている．

農業専従者は男子８に対して女子15，年令的には40～59才が⅔を占めている．兼業の種類としては自営兼業２に対して雇用兼業27（うち恒常的勤務１に対して出稼ぎ・日雇・臨時雇26）である．専業ははの０，１兼が４戸（13.8%），２兼が25戸（86.2%）．農家１戸当り経営耕地面積は55.6ａ，水田率は77.1%，耕地利用率は93.2%で，ほぼ１毛作である．農産物販売金額第１位の部門は稲作21戸（72.4%），雑穀・いも類・豆類１戸（3.4%）であった．山間にありながら周囲は国有林野が多いため，農家林家９戸の保有山林面積はわずか11ha，（うち0.1～１ha未満が６戸，１～５haが３戸）と極零細規模である．しかも保有山林面積は1975年26ha，1980年23haから，1985年の11haへ半減し，逆に保有山林無しが1975年の４戸，1980年４戸から，1985年20戸へ，移転が予想されたためか，三面集落保有山林面積は減少してきた．

三面で山菜が経済的価値をもつようになったのは大正の初め頃であるがその間の事実について，これまでの文献の記述は正確さを欠いている．「朝日村文化財報告第２集」（1977）には，「三面の生業に於いてゼンマイ採取の比重が高くなったのは，大正初めごろに，三条森町の渡辺林蔵という人によって，アオセ（アオボシ）という乾燥法が伝えられてからのことである．彼は㉘治五右ヱ門宅を宿にして小屋をかけると同時に，ゼンマイの買い付けも行なった．それ以前はゼンマイ一貫目が50～60銭だったため，ゼンマイ出荷をしていたムラ人は２・３人だった．この時，アオセを学んだムラ人の一人が，夫婦で小屋をかけてゼンマイ採りを行ない20日間で60円分の収穫をあげた．若い衆の伐木作業で同程度の賃金しか稼げない時だったから，家中でできて，毎年安定した収入を得られるゼンマイ採りは，ムラ中の注目を集めた．
なお，それ以後取引価格が一貫目３円50銭程度に急騰したという．このようにしてゼンマイ採取が三面部落の現金収入のうちで大きなウェートを占めるようになった．」とある．渡辺茂蔵編著「羽越国境の山村　奥三面[3]」（1979）には，「奥三面の生業においてゼンマイの比重が高くなったのは，大正のはじめに，新潟県蒲原郡三条森町五百川の渡辺林蔵氏によって，アオボシによる乾燥法が伝えられてからである．」とある．三井田[1]はこの件に関してはノータッチである．田口[4]は１年間三面に住んでみて，明治31年（1898）生れの小池ヨリからの聴き取りを次のように書いてある．「オレが16の年，三条（新潟県蒲原郡三条町）の渡辺林蔵って人きてな，ゼンマイ買いてえなんていって，それからゼンマイ採るようになったんだ．ほんでオレのつれあい（夫の故小池甚太郎）が，オレ，ゼンマイ採って売るなんていってなー，その頃の三面の衆なんぞ，少しは採って食べる衆もあったがな，ゼンマイなんぞ，ろくに採らなかったぜぇー．採んのはウドやウルイぐれえだったなー」，（　　）は田口の付けた注釈と思われる．

三つの文献に出てくる渡辺林蔵の所在地はいずれも現存しない地名ばかりである．田口は学者でなので仕方ないとしても，他の二つの文献は学者が書いているにもかかわらず，文献を孫引きしたり，伝聞を批判的・科学的分析をすることもなくそのまま記述し，地図や行政資料で検討しなかったための誤った記述をしたものと思われる．そもそも新潟県に大正時代に蒲原郡なるものは存在しなかった．「郡区町村編成法」（1878）によって大区小区制は廃止され，「区域が広すぎて行政上不便な郡は数郡に分けてよい」という条文によって，蒲原郡は西・南・北・中の４郡に分割されていた（東蒲原

郡は 明治19年・1886年までは福島県の管轄），明治12年（1879）以来，南蒲原郡の 郡役所は三条町に置かれ，森町村は南蒲原郡の一つの村で，1954年の「市町村合併促進法によって，西隣りの鹿峠村・長沢村と合併して，1955年１月１日以降下田村の一部となっている．

1987年11月22日，下田村南五百川（イモガワ）の 国道289南側に 沿う 渡辺正雄 （林蔵の孫， 金蔵の子） 宅を訪ね金蔵（林蔵の子）の妻（80才）から聴き取りができた．彼女は東隣りの大谷地の出身で，嫁入り後２～３年間は林蔵と生活を共にした．林蔵の和服姿の写真があり，裏に「密門院勝林入同居士」，享年62才，昭和９年９月25日，とある．それによって逆算すると渡辺林蔵は明治５年（1872）年生れ，三面へゼンマイを買いに入ったという大正３年（1914）には林蔵42才の時となる．林蔵は田畑を妻や息子の金蔵に任せて，自分は三条の友人の家に泊って，ゼンマイなどの山菜を１週間ほどかけて京都方面へ持参したり，炭・酒などを商い，炭を他人に焼かせるなどして，前貸商人的役割を演じた．五百川の区長もやっていた．当時どのような交通手段で三条や三面・京都へ出向いていたかは定かではないが，多分徒歩と列車であろう．五百川付近にも山菜がたくさん取れ，それらも商っていた．

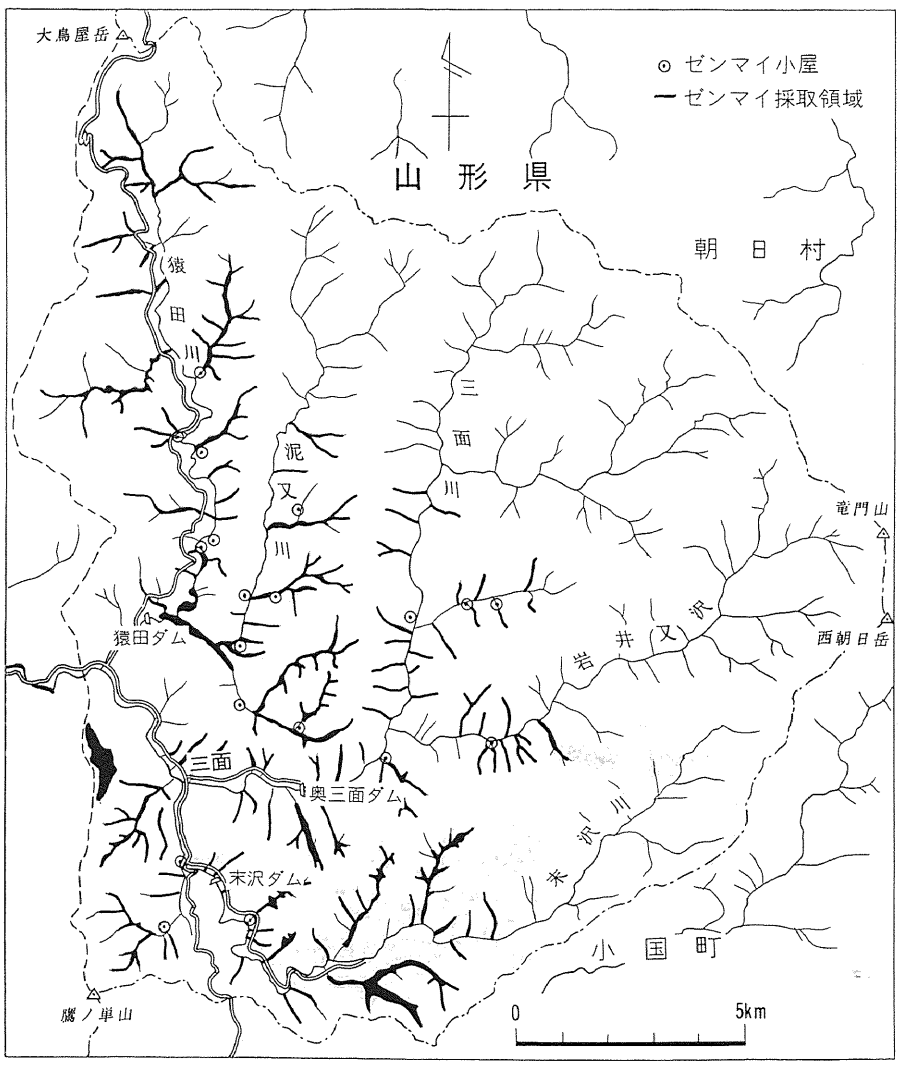
前記小池リヨの話しが正確なら，リヨ16才の年とは1914年（大正３）である．

「山に生かされた日々」[5] の三面歴史年表には，「大正２ （1913） 小池リヨ，新潟県南蒲原郡森町五百川の住人，渡辺林蔵にゼンマイの青干し法を習い，出荷始まる．（これより数年後ともいう．）」とある．ここにも森町を行政上の町と誤解しており，正確には森町村であることは言うまでもない．いずれにせよ，渡辺林蔵が三面に入った正確な年は1913年か1914年の大正初期としか現在ではいいようがない．渡辺林蔵が森町村の人だといっても岩船郡の三面の人には分からないので，最寄の大きな三条町から来た人と理解されても不思議はない．三面で自分でも山菜を採取しているので，自己採取兼集荷業者であったと想像される．

渡辺林蔵の教えたアオセ〔アオボシ〕とは伝統的な文字通り天日乾燥であるテンボシに対するもので，小屋の中に２尺５寸〔約75cm〕位の間隔で石を２列に積み上げて（高さ60cm，長さ2m位）作ったヒドコの上に，ジン竹やジサノキで編んだ簀を置き，その上にゼンマイを置いて下から火をたいて乾燥させる方法である．ゼンマイを手でひっくり返しながら10分間程度いぶしたものを１番乾しという．数時間おきに４回ほどくり返していくにつれ，２番乾し，３番乾し，４番乾しという．煙が目にしみるため，目の悪い人は保護用眼鏡をかけた．アオセ処理は，黒くなって見ばえがしないが，短時間に多量のゼンマイを乾燥できるので，最盛期には半数位の農家が行なっていた．しかし，アオセ処理ゼンマイの需要が低下したため，雨天が続いた時以外は行なわれなくなった．テンボシにすると生ゼンマイの重量は約10分１に減り，アオセの場合には，もう少し目方がでた．テンボシは収穫したゼンマイの綿をとり，大・中・小に区分して束ね，釜でゆでた．綿は以前は座布団や布団の綿に混ぜて利用した．ゆでたゼンマイは筵に広げて干し，色がピンク色に変わってくるとかき集めて手でもんだ．もむことによって水分が抜けや易くなり，柔らかくなる．晴天ならば２～３日で完成品となり，女・子供が主にこのもむ仕事に従事した．

以前は車・オートバイが利用できなかったので，ゼンマイ小屋をかけ，そこに寝泊まりして採取した．採取シーズンはその年の残雪の具合で決まるが，５月上旬から６月上旬にかけてである．丁度田

植と重なるため猫の手を借りたいほどの忙しさである．1982年のゼンマイ採取は5月8日に始まり，学校も5月9日から10日間ゼンマイ休みとなって，子供達もゼンマイ小屋に泊まり込んだりして，綿取りや，ゼンマイもみを手伝った．ゼンマイはシダ植物のため日向斜面にはなく，湿気の多い北向き斜面やガレ場，崖などに密生しているので採取に当っては足元があぶなく，底にスパイクのついた地下足袋をはいた（第1図）．縄で編んだテンゴと呼ばれる袋を背負い，腰にはサゲ（腰）テンゴ（小籠）をつけて出かけ，サゲテンゴにいっぱいになるとテンゴに移した．ゼンマイ小屋から採取に行く場合には，午前，午後各1回出かける．シーズン最盛期には，男は1日15～20貫目（約56～75kg），女は8～10貫目（30～38kg）採ることができた．しかし，シーズンも終りに近くなると男でも1日5貫目(20kg)位しかとれないこともある．ゼンマイは胞子で増殖するため，必ず何本か残しておいて翌年の増植に備えておく．しかし，禁猟以来カモシカが増えてゼンマイを食い荒らすことが多くなった．



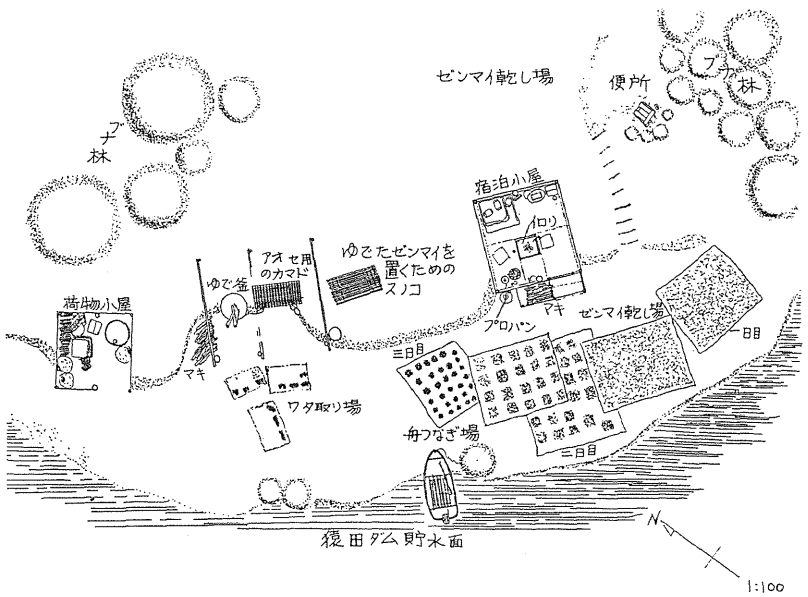
第1図　三面地区のゼンマイ小屋とゼンマイ採取領域（『山に生かされた日々に』より作成）

1970年代半ば三面集落で自家用にだけゼンマイを採取していたのが10戸，残り30戸は現金収入を目的に採取していた．家から通いで採取していたのが９戸，他の４戸は女手だけで取っていた．通いで採る場合は，部落共有林（ムラ山）内でも国有林内でもよく，良い場所を確保するために夜明け前に家を出なければならなかった．５日間位続けて同じ場所で採取していると他人は入って来ないといわれている．

〔ゼンマイ小屋〕

1955年頃までは総戸数の70％がゼンマイ小屋で宿泊してゼンマイを採取し，多い家では３～４カ所にゼンマイ小屋をもっていた．1960年頃から集落に近いゼンマイ小屋から姿を消し，1970年代半には総戸数の40％，17カ所に減ってしまった．山に泊まることをスノといい，その山をスノヤマと呼んだ．スノヤマは集落から歩いて片道１～６時間，３～24kmまでの距離のところにあり，ゼンマイ小屋は付近の木や草を用いて建て，他家と採取範囲が重ならない程度に分散し，１度建てると５・６年はもった．しかし，１年に１回利用するだけなので破損もはげしく，小屋入りの前に修理に来たり，宿泊に必要なフトン，鍋，プロパンガスボンベイなどをあらかじめ運んでおかなければいけなかった．小屋を放棄しても，その持主が採取に来ることもあるので，３年間は他人が入ることはしないが，４年目からは自由に入ってよいことになっていた．ゼンマイ小屋は２棟から成るものであり，１棟は宿泊用，他は物置きに利用され，宿泊棟は４畳半ほどで，中に炉が切ってあった．猿田ダムができてからは船外機付きボートでダム湖を渡って小屋がけをし，小屋住みの間中，副食は全て周辺のウド・ウルイ・イタドリ・フキノトウ・ミズ・ヤマフキなど約30種類の山菜でまかない，川で釣った魚も食卓にのぼる（第２図）．

小屋の分布は1970年代半ばには猿田川水系５，泥又川水系５，三面川本流４，末沢川水系３で，多



●ゼンマイ小屋配置図●
猿田川上流にあった伊藤寛のゼンマイ小屋。図の右手五〇メートルに小さな沢があり飲料水として使っている。二棟の小屋のうち一棟は居住用、一棟は物置き用。小屋と小屋の間にはゼンマイをゆでる釜がある。空地にひろげられた糸クズ状のものはゼンマイで右から一日目、二日目、三日目と干しあがっていく。

第２図　猿田ダム貯水池東岸のゼンマイ小屋（田口，1983より）

くは沢口に位置していた（渡辺，1979）．ゼンマイを干すために日当りが良く，かつ飲料水の得やすい場所が選ばれた．

〔ゼンマイの出荷〕

乾燥ゼンマイは小国や小出などの商人によって集荷されたが，農協でも集荷を始め，1970年代半ば頃は農協扱いが約半分を占めていた．出荷先はテンボシは主に関東へ，アオセは主に関西方面である．三面全体で1970年代半ば頃毎年平均120～130俵（1俵＝10貫目＝37.5kg）のゼンマイが出荷され，1俵20万円（5000円/kg）として，2,400万～2,600万円，1戸平均約60万円の現金収入があった．ゼンマイ小屋での乾燥ゼンマイの生産量は1日平均6～7kg，カマスや南京袋に入れて40kg（1俵）にまとめて出荷される．小国・米沢などの山形県側の業者，新発田・三条などの新潟県側業者は，冬季用飯米や生活必需品を前貸の形で提供して，ゼンマイで決済させることが多かった．4km程度の自家用を残して農家は出荷する．太く，長く，あじがよく，柔らかな三面ゼンマイは5,000円/kg以上で売れ1戸平均60万円，中には100万円を越す者もいた．乾燥ゼンマイは産地仲買人から，3～4人の中間業者を経，消費地で生物にもどす加工業者によって7倍の重量の加工ゼンマイにされ，スーパーなどの小売店で販売される．

〔その他の山菜〕

昭和30年代以降の山菜ブームによって，ゼンマイ一辺倒であったものが，ナメコの栽培と生出荷が始まった．その後ナメコの缶詰加工が始まり，1966年にはナメコ組合（組合員数は当初14戸，のち9戸）が発足して天然ナメコのみならず人工栽培ナメコを出荷するようになった．ホダ木は組合として営林署から払い下げられる薪炭原木の中から利用した．春～秋にホダ木にナメコ菌コマ打ちをやり，国有林や私有林に置いて秋に採取した．10月中・下旬には，缶詰加工が行なわれ，4・6号缶で箱詰出荷された．出荷先は村上市堀ノ内の業者，農協などへ出荷された．組合出荷額は1970年代半ばで600万円，個人出荷額の合計はそれ以上であると推定されている．9～11月のナメコ販売による現金収入は，それだけ出稼ぎ期間を短縮する効果をもっていた．ワラビは3つの業者が三面集落から買い入れ，2,000kg入りの大桶やコンクリート槽に漬け込んで，新潟方面の業者や旅館・ホテルなどへ出荷していた．買入価格は生モノで100円/kg，出荷量は10tほどであった．

ゼンマイ・ナメコの外には，7～9月のキクラゲ，8～9月のトビタケ，10月のマイタケなどがあったが，商品として出荷されるのはゼンマイ・ワラビ・マイタケ・ナメコくらいであった．栗は昭和30年代半ばには出荷しなくなった．

〔山菜の経済社会的意味〕

「春先の田畑の手入れから始まり，火野畑，川猟と仕事も重なる．炭焼もごく小規模に行なわれた．さらに，冬の狩猟，ワラ仕事と山林特有の生業が展開される．1949年の三面集落の収入割合は，山菜6，栗2.5，狩猟1.5になる」[6]．ゼンマイを主軸とする山菜採取は短期高所得性のため，出稼ぎ・人口流出を阻止する機能をもち，所得・戸数・人口維持機能をもってきた．山菜が経済的価値をもつ以前の現金収入はスゲゴザ・カモシカの皮・熊の皮・熊の胆などであった．狩猟は全員が参加できるものではなく，水田は山の奥地で冷害には弱く，収量も一定しておらず，米も自給できなかった．

「三面ではゼンマイ採取のはじまる以前は28軒しかなく，それ以上に家が増えたらつぶれる家が出るといわれ，・・・・ゼンマイ採取のはじまった大正5年から末頃までの間に，少くとも5軒の分家が出ているのである．そのうち2軒は田畑をもらって分家している．3軒は田畑なしの分家であった．・・・分家できる基盤をゼンマイがもたらした．・・・三面は山中にありながらも平場と同程度まで経済水準を引き上げ，尚も分家が相次いで，現在の42戸まで増えた。[7)]」

1960年の人口230から1970年の198へ，32人減，人口減少率13.9%は，全国山村のそれの24%と比べて低かった．1985年の兼業の種類で主に出稼ぎはわずか1戸に過ぎず，後述の高根集落33人や岩崩集落の3人に比べて非常に少ない．1970年の全国山村平均所得121万に対して，三面は平地農村の平均144万を若干上回っている．「子供は金づかいが荒く，小学生で月に3,000円の小遣い銭を使い，服装持物も都会なみであるという．・・・山菜以外の，農家における飯米の確保と余剰米の政府売渡し，営林署下刈，森林伐採，スーパー林道工事，発電所職員，学校給食業務，教員住宅炊事，出稼ぎなどの多様な賃金収入，さらには民宿，商店などサービス収入を含め[8)]」三面には多様な収入源があり，僻地でありながら，経済的にはかなり充実し，その大きな柱が山菜であった．
1985年農業センサンスで29農家のうち21戸が歩行型動力耕耘機，農用トラクターおよび動力防除機を所有していた，これは他の集落に比べて非常に高い普及率であった．

Ⅳ—2　高根集落の事例

三面川右方支流高根川流域が旧高根村である．その最奥の海抜100mにあるのが高根集落である．1985年センサスで世帯数189，人口920，1980年のそれは194世帯，933人で，5年間に5世帯，13人の減少であった．農家数140，専業はわずか2戸(1.4%)，第1種兼業も8戸（5.7%）で，130戸（92.9%）が第2種兼業である，兼業の種類としては出稼ぎ・日雇・臨時雇69戸（50%），恒常的勤務57戸（41.3%），自営兼業12戸（8.7%）である．約半分を占める日雇・臨時雇の内容は山林労務である．

平均経営耕地面積は55.6a，農産物販売金額第1位部門は稲作が127戸（90.7%）で，あとはその他の作物・肉用牛・養豚が1戸ずつあるのみである．農家の80%が林家でその保有山林面積は102ha（うち人工林9.7ha）平均0.9haと割合大きい方である．20～50haクラス1戸，5～20haクラス2戸，1～5haクラス14戸，極零細な0.1～1.0ha未満クラスは農家林家の84.5%を占めている．以前は集落内に6軒の山菜取扱い業者がいたが今日では遠山定吉1軒となってしまった．山菜の収穫量が減ってもうからなくなったためである．遠山家ではゼンマイは扱わず，その他の山菜を塩漬けにして湯之谷村へ出荷する．遠山家と採取者の関係は，採取者が持参することもあるし，遠山家が取りに行くこともある．湯之谷村の場合は向うから車で取りに来る．三面地区石住に朝日産業食品工業があり，車のない頃は荷車で高根の遠山家に山菜を集荷に来ていた．湯之谷との関係は，10年ほど前高根生産森林組合の視察で湯之谷に行った時湯之谷山菜加工農業協同組合が広く原料山菜を求めていることを知って出荷するようになった．高根で採取される山菜のほぼ半分が遠山家が扱っていると当人は考えており，他は他の業者が扱っている．最盛期は1978年頃で，年々採取量は減少し，ピーク時の2割程度しか扱っていない．高根小・中学校には山菜休みはない．湯之谷山菜加工組合は1965年林業構造改

善事業によってなめこ加工工業を建設し，山菜の加工・販売を行なう同村最大規模の企業で，大字宇津野にあり，資本金6,270万円，組合員474名，従業員107名，他地域から広く集荷し，経営順調で組合員への配当も行なっている[9].

山菜採取量減少の理由は拡大造林による山菜自生地の減少，採取者の高齢化，1985年に入山料（1000円/日，500円/半日）を取って他所者の山菜採取を認めたところ，村上・新潟などからの山菜採取のプロが入り込んで根こそぎ取り尽してしまったりしたことなどがあげられる．遠山氏は5月初旬～10月までフキノトウ・ワラビ・フキ・ミズ〔ウワミズザクラ〕・マタタビなどを集荷して塩漬けにして湯之谷へ送るが，主には森林組合の山林労務に携わる．冬は近くの山仕事があればやるが，関東・関西・広島などへ出稼に出ている．

天然山菜に代って1978年第二次林構特認事業でナメコ工場を641.52m^2，鉄骨2階建て，4,261万円をかけて建設した．おがくずは1968年にできた高根生産森林組合高根チップ工場から得，5人（常雇3人，臨時2人）が栽培に当り，年5回の回転で，1960年度は17tの生ナメコを生産し1,075万円の売上げ，缶詰として11,262缶，3.8t加工し，356万円，合せて1,431万円の売上げがあった．

シイタケ栽培の組合が二つあり，朝日椎茸組合と高根椎茸組合で，いずれも組合員は5人ずつである．林構の補助金600万円で乾燥・加工施設が作られた．ナメコ・シイタケの製品の2割は国道7号沿いの村営「みどりの里物産館」で販売され，残り8割は中条市場などへ出荷される．

V　森林資源の利用と村の活性化

V－1　林産物の加工

朝日村の工業事業所の中で最も多いのは12（1984工業統計）を数える木材で，147人を雇庸し，16.8億円の生産額をあげた．2番目の食料は7で29人の雇庸力しかないが，5億円の生産をあげている．前述高根生産森林生産組合のナメコがそれの一つである．三面地区石住にある朝日産業食品（従業員6名）は，山菜・野菜（ゼンマイ・フキ・タケノコ・ワラビ・ウド・ミズナ）の加工を年間行なっており，昭和57年度新潟県農林水産業総合振興事業として，朝日椎茸組合に対する補助として，工場内に加工施設が建設された．原料の4割は朝日村から，6割は秋田・福島・外国などから調達している．とくにゼンマイは中国・ソ連から大手商社を通して輸入している．野菜は契約栽培によって集荷したり，ミョウガ・大根・野沢菜・大豆などは農協ルートで集荷している．朝日スーパー林道へ通づる県道村上一岩崩線に面する工場前の売店で直販する外，国道7号線沿いのみどりの里で「またぎの里」のブランドで販売している．大口はジャスコ，豊栄市カネマタフーズ，岐阜県・富山県・静岡県に出荷している．多量に使用する水は三面川とその左方支流長津川の扇状地性の土地から井戸水として汲み上げている．

高根生産森林組合の下部組織として朝日工芸事業協同組合があり，日用品（皿・盆・ビール袴・箱）・茶器・花器・座卓・菓子器などをみどりの里物産館で販売している．村上堆朱（ついしゅ）が猿沢地区で行なわれている．城下町村上との接触変質とみることもできるし，材料のホオ・トチ・カツラなどの原木の存在が漆塗を受け入れたと考えることもできる．文政年間（1818～1829）江戸詰の村上藩士頓宮（とん）次

郎兵衛・沢村吉四郎が江戸で学んで来て広めたと言われている[10]．天然木の木地に彫刻をし，朱漆を塗った「堆朱」，黒漆を塗った「堆黒」，数色の漆を塗り重ねた「紅花緑葉（三彩彫漆）」などがある．木地・彫刻・髹漆の3工程あり，それぞれ木地師・彫師（ほりし），塗師（ぬし）と呼ばれ，一人で2工程以上やる人はほとんどなく，分業で行なわれている．花器・茶器・菓子器・箱類などとして製品の8割は県内へ，2割が県外へ出荷されている．

猿沢で堆朱の漆器店を経営している鈴木太一郎は，同時に猿沢の国道7号に沿う猿沢農産物加工施設の経営者でもある．施設は昭和61年度新潟県農林水産振興事業として，3,170万円で猿沢野菜生産加工組合（組合員6）に対して作られたものである．地元産の農産物の加工をやり，主にソバ・モウソウ竹缶詰・メロン粕漬などを作って鉄道弘済会，スーパーウオロク（新発田市），みどりの里等へ出荷している．山菜加工は自給程度にしかやっていない．

三面川右岸，県道村上一岩崩線沿いに，朝日キノコセンター（布部字木ノ平）がある．村上市中心部の食品取扱商店大滝（株式会社）が近くのチップを原料にナメコ・マイタケ・シメジ・シイタケを栽培している．常時5人（男1人：工場長，他4人は女），多忙時は千縄の6人のパートを雇っている．14年前の1973年村上市でマッシュルーム栽培を試みて失敗した施設を大滝商店が買収したもので，製品は村上市内などの旅館・料理店・店などへ納める外，中条生果市場へ出荷したり，秋のシーズンにはスーパー林道経由の観光客にセンターで土産物として販売している．菌は酒田の川村食菌や宮城県宮城町の東北椎茸などから購入している．千縄の人4～5人がゼンマイをシーズンに大量に採取してもち込むのを購入している．大滝商店は以前はゼンマイなど山菜集荷のため，村上から小国経由で1時間50分かけて三面まで出かけていた．今日は岩船・北蒲原郡など下越地方の約100の集落から，6月半ばから8月10日にかけて，富山の鱒鮨や越後の笹だんご用の笹を集荷し，岩船郡神林村里本庄の工場で乾燥して生菜資材業者（新潟市など）に納入している．笹の採取は主に農家の老人でゼンマイ同様に造林によって減少してきているが，達人になると，1夏に30万円も稼ぐ人もいる．大滝商店は，きのこ類・山菜類の外，笹の葉・もち草・むきクルミ，けい卵，食肉・冷凍珍味・青果物・業務用料理材料などを生産・販売するミニ食品商社とみることができる．

朝日村の林産物販売を目的に，林構の補助金3.6億を使い，4年間かけて猿沢の国道7号東側に「朝日村みどりの里　物産会館」が建設された．奥三面の民家を「またぎの家」として移築して見学に供している．広い駐車スペースと食堂が完備している．村内で採取・加工された山菜の漬物・缶詰，木工品，藁細工，焼物などを販売している．

みず菜（山菜）・笹だんご・さと芋・柿・メロンの粕漬など農林産物の都市住民への直送販売を目的とした「ニイガタ首長国連邦」（構成市町村：黒川村・笹神村・大和町・津南町・牧村・両津市・聖籠町・朝日村）（入会金5,000円，年会費1.5万円）の一員に朝日村は加盟している．連邦事務局を新潟市に置き，共同で，ＰＲを行なっている．朝日村はそれとは別に，清瀬市と1982年の上越新幹線開通を機に姉妹都市関係を結び，同様の会員制度による農林産物の直送販売をやっている．清瀬市内に旭が丘団地（2300世帯，人口8,000）があり，同じアサヒのよしみで姉妹都市を結んだ．子供・大人のお祭り，ゲートボール，稲刈体験などを介して相互の交流が盛んである．清瀬市在住在勤の人

ならだれでも「みどりのふれあい・あさひ会」に入会でき，年4回送付，20,000円のコースと，単品で3,000～5,000円のコースとを合わせて333名が会員となっている．単品には山菜・メロン・鮎・柿・巻鮭・はらこのしもち，などがある．

V－2　森林のレクリェーション利用

森林はそのままではレクリェーション用に利用しにくく，道路・標識・休憩施設などを整備して、初めて価値が出てくる．約1億円以上かけたプロジェクトが四つがある．

〔朝日スーパー林道〕

新潟県・山形県の二つの朝日村を結び全長52.1kmの朝日林道が，森林開発公社の手によって72億円の巨費と1971～83年，13年の歳月をかけて完成した．第1義的には林業のためであるが，同時に沿道住民の生活道路でもあり，観光道路でもある．幅員4.6mと広くはないが，新潟県側では猿田ダムまで舗装されている．

村単独事業として700万円かけて国道7号との分岐点と，沿道に案内板を立てて住民や観光客の便宜を図っている．

〔二子島森林公園〕

三面ダム湛水によって二つの島となったところをボート・キャンプ・休憩施設を設けて村営公園としている．二次にわたる林構と村単独事業などで2億円をかけている．県下農村青年の親ぼく会などに利用されている．

〔猿田川野営場〕

文部省が猿田川ダムに教育施設として1982年から3年間，1億円をかけてつくったもので，管理棟とテント場を備えている．

〔生活環境保全林グリーンパーク〕

国道7号の西側，日本海との境をなす三額山（551m）南半部を，県営事業として，1983年から3カ年かけて，道路をつけ，展望台・休憩所・便所をつけて，近隣レクリェーション地として整備した．この事業の現実的メリットは朝日村から，日本海へのアクセスが高まったことである．

Ⅵ　お　わ　り

林野率91％の朝日村は，生活の大きな部分を林野に依存してきた．山間に位置する三面集落は大正初期にゼンマイが商品価値を得て以来主要な現金収入源となってきた．とくに昭和30年代以降の山菜ブームにのって，一時は山菜が三面の収入の6割を占めたこともあった．学校でのゼンマイ休暇，ゼンマイ小屋での生活，ゼンマイ干しと出荷などゼンマイを中核とする山菜は山村の経済・社会生活を規定してきた．高根にあっても，山菜採取は生活のリズムの一部をなしていた．採る山菜から育てる山菜へ，ナメコ・シイタケの人工栽培を始めた．山菜を中心に野菜など食品加工工業が関連産業として芽生え，村の生産額向上に役立っている，

山菜や木材，河川漁業の外に，新しい村活性化策として工場施設と並んで，朝日スーパー林道開通

に伴う観光施設の建設による観光客の呼び込み，グリーンパーク生活環境保全林指定および整備によって山菜シーズンに村上・新潟方面からのハイキング客を呼び込んでいる．しかし，観光化が村の経済に及ぼす影響は土産物を買って帰るだけで，宿泊所もなく，観光用の事業費を導入して事業を行なっているだけである．事業の中心は道路の新設であるため，地域住民の生活環境整備に貢献してきたことは確かであるが，せっかくの投資を村の活性化に生かすには，外来者にお金を落とさせることも考えなければならないだろう．清瀬市などへの山菜，農水産物の直送販売システムなども，今流行の村の活性化の一つの方法ではある．しかし，アイデア・イヴェントを長続きさせるのはむつかしく，地道な恒常的な産業の基盤整備が最も大切である．

第1図は小崎四郎技官に製図していただいた，記して謝意を表したい．

本研究は文部省科研費「ブナ帯における山菜の促成栽培に関する風土論的研究」(№61580199)（代表斎藤功）の一部を使用した．

注・参考文献

1）三井田圭右（1969）：『山村の人口維持機能』大明堂．

2）朝日村教育委員会（1977）：『朝日村文化財報告書第2集　朝日村の民俗（高根・塩野町地区）』．

〃　：『朝日村文化財報告書第3集　朝日村民俗Ⅱ（舘腰・三面・猿沢地区）』．

3）渡辺茂蔵編著（1979）：『羽越国境の山村　三面』山形地理談話会．

4）田口洋美（1983）：山に暮らす日々――新潟県岩船郡朝日村三面――，あるくみるきく，197，近畿日本ツーリスト日本観光文化研究所．

5）「山に生かされた日々」刊行委員会（1984）：『山に生かされた日々新潟県朝日村奥三面の生活誌』．

6）前掲3)．

7）前掲4)．

8）前掲3)．

9）隣接する入広瀬村は「さんさい共和国」を宣言し，村長が大統領となっている．1981年度林構により1.2億円（うち国6,057万，県1,358万，村4,699万円）をかけて，山菜会館を建設した．山菜の活用によって安定した就労の場とするため，生産・加工・販売の一体化した建物をつくり，生産工程を見学できるようにしてある．村が事業主体となり，1973年設立の入広瀬村山菜生産組合103名が協業利用者となっている。原料山菜の地元産はわずか8％，県内産18％，県外産13％，外国（中国が主）61％である．販売も地元は1割で，9割は問屋経由で東京方面へ出荷もされている．

10）磯部利貞・林正己・山崎久雄（1981）：『新潟県の地理散歩　下越編』，野島出版．

Role of Mountain Vegetables in Asahi-mura, Niigata-ken, Japan

Hiroshi SASAKI

Asahi-mura (village) lies in the northern part of Niigata-ken (prefecture), bordering on another Asahi-mura of Yamagata-ken. The name Asahi means sunshine but the name Asahi of both muras comes from Mt. Asahi (1813.7m above sea level) between them. The Asahi-mura in Niigata depends its econmic livings mostly on the forest, the percentage of which in

whole mura area amounts to 91%. People in Asahi-mura, especilly in Miomote-settlement in the remote mountain valley earned their living by gathering the mountain vegetables (esp. the royal ferns and brackens), which are sold with high prices in the natural food boom. Income from the royal fern amounted in 1970's to 60% in whole family income in Miomote-settlement. In November 1985 whole 42 families of Miomote moved out of the settlement to neighbouring Murakami-, Niigata- and Toyosaka-shis (cities), because of dam building.

All social life are determined by gathering the royal ferns and other mountain vegetables. From the biginning of May to the middle of June almost all engaged themselves in gathering the royal ferns. In this period the school made the royal fern vacation, pupiles to join to gather the royal ferns. They built small cottage (called the royal fern cottage) along the small valleys and their branches (Fig. 1) and stayed there for several weeks and dry the gathered royal fern to sell (Fig. 2).

There are some cannaries of mountain vegetables in the village. Because of water reserve dam building, the opening of Asahi super forest road (between both Asahi muras) and afforestation of coniferous trees, the growing area of mountain vegetables has been decreasing. They began to cultivate mountain vegetables as nameko and shiitake (a kind of champignon). Some kinds of cultivated mountain vegetables are processed to canne or dried-, or salted-goods to market. But the role of mountain vegetables in the economy of the village has been decreasing. The village authorities put emphasis on industrialization and tourism to develope the economy and to maintain the jobs. They invited the factories of electoric parts (6 factories and 500 workers) and the project of "green park Seikatsu Kankyo Hozenrin (forest for keeping the living environment)" in the western hills of the mura territory.